

響

流



西光寺本堂須彌壇 雲水龍彫刻

春のお彼岸のご案内

春季彼岸会期間
3月17日(土)～23日(金)
彼岸会合同法要
3月20日(お中日)
午前11時から12時

西光寺すべてのご門徒対象の彼岸会です。
ぜひお参りください。

私にとって有縁のご先祖はお釈迦様のお弟子として諸仏となられました。諸仏方は自我の思いで比較の世界で迷いながら生きる私に、浄土(彼岸)の光明で照らし、如来大悲の世界を開く「弥陀の本願」に目覚めることを進めて下さいます。その諸仏方に報謝の念より懇志をお包みくださいますようお願いいたします。

西光寺通信『響流』 第73号
発行日 2012(平成24)年3月1日
発行者 真宗大谷派(本山/京都・東本願寺)
西光寺 住職 藤石哲朗(法名釋徹舟)
〒110-0015 東京都台東区東上野6-15-6
Tel. 03-3841-3229
Fax 03-5828-4495
E-Mail saikoji@xvh.biglobe.ne.jp

我 照 常

住職のつづき

大震災から一年が経ちましたが、私達が普段当たり前だと思っていた事が、実は何ら抛り所にならないことがあらわになったことだったと受け止めなおしたことでした。

それは自然ということでもそうです。その自然を抑えようとした防潮堤に代表される構造物もそうです。恵みを与える海は大きな牙を剥いて襲いかかりました。大きな地割れや大規模な液化化もそうです。科学技術の粋を集めた原子力発電所もそうでした。人間の傲慢な意識が暴露されたと言って良いかもしれません。

「何も起こらないことの幸せ」をあらためて噛み締めますが、当たり前の、平凡な、穏やかな日常は、本当は非日常を背景に抱えていたのです。私たちの将来的計画や希望といった「人間の思い」は、あまりにも厳しい非日常の相^{すがた}こそが、実は生きるということの真の相^{すがた}だったのです。人は誰でも、次の瞬間には死んでいかねばならないのです。そういう「今」を「誰でもない私」として生きているのです。私の思いは「まだしばらくは」

と根拠もなく思っているけど、事実は次の瞬間存在していない、といういのちを生きているのです。

お正月号で案内をした「いのちのふれあいゼミナール」が2月19日(日)に西光寺で行われました。その中で、エリザベス・キューブラ・ロス先生のことをご紹介されました。死を前にした200人以上の人と対話が随分前に出版されましたアメリカの精神科医です。講師の加藤真人さんはその中の一人の言葉を紹介されました。「私は良い生活は送って来ましたが、本当の生活は送ったことがありませんでした」というものです。原文では「True Living」となっているはずですが。

また以前、江東区にある大谷派の因速寺住職武田定光さんが、『自然死への道』（米沢慧著・朝日新書）にロス先生が死の床にある人たちから学んだことは「死の宣告を受けた時に真に生が始まる」ということだった」と書いてあるのを思い出しました。

北海道のお寺の坊守さんだった鈴木章子さんは43歳で乳癌になり、その後肺に子宮にと転移しその最後に

癌は

私の見直し人生の

ヨイドンの癌でした。

私、今、

出発します。

という詩を残しておられます。癌をスタートの合図の Gun (ピストル) とかけてらっしゃるのでしょうか。

「人生はやり直しは出来ないが見直し出直すことは出来る。癌のお陰で死を見据える眼が深くなり、一日いただくことができた、生命の限らない重さにも気付かしていただくことができ、はじめてこのいのちをどう生きたらよいかも見えてきた。癌のお陰で、ようやく人生の意味も、いのちの重さも、そしてあるべきようも見えてきた。死は終着点ではない、出発点だ。よし、やるぞ!」というのです。「乳癌だけでは気付かないボンヤリ者の私のために、肺癌、転々移という癌までくままして、章子よ、目覚めよ、章子の華を咲かせてくれ」との、如来さまの大慈悲の賜り物であった」と感謝しつつ47歳の生涯を閉じられたのでした。

私達も実はすでに死の宣告を受けているのでしょうか。ヨードンの音を聞いているはずなのですが気づいていないのでしょうか。

私たちは誰も幸せを求めて当然生きています、では、どうなることが幸せになることかわからないままに生きていてのではないのでしょうか。そこでとりあえずは自分にとって都合の悪い状況が、自分に都合のよい状況に変われることを願うようになります。多くの「宗教」といわれるものの「ご利益」とはそのようなものです。

お釈迦様の明らかにされた仏教の基本認識は、物事はすべて縁起の道理によつていとおおきえますから、たまたま都合のよい状況になる場合もあるでしょうが、大抵の場合は天気ひとつとっても自分の都合のよいようにはなりません。

しかし、新興宗教等では都合よく改善しない場合には「信心が足りない」といわれて、更に深い迷いにはまっけていくこととなります。

以前、新潟地震で一家の乗った車がたまたま通ったトンネルが崩落し、幼い男の子を残して他の家族が圧死したということがありました。少し前にその団体に疑問を持ち退会するということがあったそうですが、信

心が足りなかったからの、会をやめたから仏罰だのと平然とうそぶいたというのです。仏教の道理を無視し、いかに痛みを分かち合えない団体だろうかと心寒いものを覚えた記憶があります。

また、閉塞した社会を反映してか、新宗教ではこの世がダメならあの世で幸せになろうと説いています。



鈴木さん自身も、「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と、努力が足りないとお子さんのお尻を叩くように教育してきたとおっしゃいます。だけど、片肺を取られた体は、子供に心配かけまいと笑ってやろうとしたのに笑い声一つ立てられず、握り返す手も全く力が入らない。そのとき、様々な条件が整わなければ（つまりこれが縁ということですが）何一つできないのだと、「自力なのか何もなかった。すべての自力は他力に支えられてあったんだ」と気づかれたのです。

金子大栄先生は

「信仰は、宗教は、その人の置かれた状態を直すのではない。お金のない人が急にお金持ちになったり、魚の獲れないときに急に魚がとれるようになったり、そういうふうな状態を直すのではなく、人間そのものを救う」と語っています。

人間は状況を悲しみますが、如来は存在を悲しんでくださいます。私たちは「救われた」と思うときは、苦の状態からのがれて救われたと思う。

つまり条件が変わらないと救われないような気がする。そうではありませんね。

癌が治らなければ救われないなら絶望でしょう。

なぜなら、たとえ癌が治っても私たちは死ぬ身を生きていますから、必ずいのち終えていく存在です。私の都合の良い状況を求め続ける限り私たちの苦悩はなくなるからです。

鈴木さんと同室の方が退院されるというので「よかったですね。早く退院して子どもさんを安心させてあげなさい」というと、「いいえ、あさつての大安まで退院しません」と答えたそうです。

でもどうでしょうか、大安の日には喜ばしいことしか起きないかというところではありませんね。新聞に目を通せばどの日もこの日も同じように喜びと悲しみも満載しています。わざわざ大安の日を選んで退院されたその方は年が開けてすぐ亡くなられたそうです。

わが心にかなうことだけで人生が準備されているのでありません。喜びも悲しみも、愛も憎しみも成功も失敗も、健康も病気も、同じようにとりそろえてくれています。むしろ思うようになることばかりの人生では極楽トンプミみたいな人間になってしまいませんか？

ところで、「有り難い」の反対は何でしょうか。「当たり前」ですね。幸せが当たり前としか受け取れなければ、人間はどこまでも傲慢な墮落した存在になっていきます。そもそも仏教は人間の苦悩から生まれたものです。思うようにならない人生、



悲しみや苦しみによってこそ、聞く耳が開け、アンテナを立てさせていただくことができ、そのことよって教えに出会い、人生を大きく変えてゆくことができた、悲しみや苦しみを積極的に「ようこそ」と受けて立つてゆくと、如来の励ましに出会うこと、そのことが私が私として生きてゆくことでないかと思えます。

薔薇は薔薇に成るから尊いのです。タンポポは薔薇に成る必要がないし、成ることはできません。もちろん、薔薇に成れないことを卑下する必要もありませんし、そもそも他と比べて苦しむのは人間だけでしょう。「人知るもよし、知らぬもよし、われは咲くなり」武者小路実篤のことばですが、これが花の決意です。

比較の世界では優越感では人を傷つけ、劣等感では自分を傷つけ、最後には自ら破滅していつてしまうこともよく起ります。お釈迦様は「あなたはあなたになればよい」とお示しくださいます。薔薇も薔薇として咲かなければいのちを全うしたことになりません。自己満足ではなく、自体満足の世界に生きて欲しいと願われているのです。

「目覚めよ！どうかあなたの華を咲かせてくれ」と呼びかけ続けてくださるのが阿弥陀様です。そしてそのことの大切さを私達に先立つて亡くなっていかれ、縁あって親子であり夫婦であった方々は諸仏となつて阿弥陀の願いに目覚めよ！と叫んでくださっているのです。亡き方の願いは、「自分の思い通りに成るように守ってちょうだい」と私に手を合わせるのではなく、自分の都合のよいようになることが幸

せだと思いいこんでいることから解放されなさい、誰にも代わることのないあなたを、どんな状況になつても逃げることなく生ききつて欲しいと願われているのです。

また、そのことはたとえ自覚していなくても、私たちの深いところで響いているのでしょう。だから、みなさんはお参りに来られるのではありませんか。亡き方の願いが身を動かすのです。

でも、お墓参りだけに終わるならば、それは本当に亡き方の願いを受け止めたかという不十分だと言わざるを得ません。

西光寺は苦悩に向き合つて生きてゆく道理(教え)を皆さんと共に確かめる(場)として存在しています。そのための行事が次のように用意しています。いつでも、どなたでも、ご参加できます。

- ◇ 3月20日 (春分の日) 春季彼岸会合同法要
- ◇ 5月20日 (日) 春の法要 「永代経」
- ◇ 7月15日 (日) 孟蘭盆会
- ◇ 9月22日 (秋分の日) 秋季彼岸会合同法要
- ◇ 11月3日 (文化の日) 西光寺 報恩講 (親鸞聖人のご命日)
- ◇ 偶数月の第三土曜日 西光寺聞法会 (輪読と話し合い)
- ◇ 9月15日 (土) いのちのふれあいゼミナール

西光寺・源隆寺 合同旅行会

前号

でご案内の旅行会は日程を一部変更しました。観光シーズン真っ盛りの三連休では経費が大幅にアップしてしまい、また移動も予定通り行くかどうかという問題も出てきますので、

2012（平成24）年11月27日（火）日〜29日（木）の二泊三日に変更しました。

報恩講は27日の速夜法要に参詣しますが、せっかく本山（京都・東本願寺）の報恩講参拝を中心に企画しましたので、28日の「結願日中」法要のクライマックスで「坂東曲」（ばんどうぶし）と呼ばれる勤行にも参詣できる日程になりました。

源隆寺さんとは、親鸞聖人の足跡をたどる旅行を、テーマを決めて行なおうと話し合いました。



今回はお誕生（日野誕生寺）から出家・得度（粟田口青蓮院）、更に比叡山（延暦寺及び横川）での修行、六角堂での百日参籠までの足跡を辿ります。

経費を抑えるため、一日目は烏丸五条のビジネスホテルを利用します。二日目は門徒さん同士の懇親もはかりたいと念願していましたが、琵琶湖を臨む落ち着いた温泉旅館を利用することになりました。本山報恩講の時期は紅葉の盛りで、京都自体一番込み合う時期ですので、新幹線の割引も低く宿代がどうしても高くなります。しかし、なんとか安くなるよう現在交渉中で7万円までにしたいと思っています。

お足の悪方でも大丈夫なように手配してありますので、どうぞご参加くださいますようお願いいたします。



東本願寺別邸「枳殻邸」